

# 博士論文審査結果報告書

2023年2月1日

論文提出者	論文審査担当者
<p>専攻領域 リハビリテーション科学領域</p> <p>専攻分野 神経・運動機能リハビリテーション分野</p> <p>氏名 林 真太郎</p>	<p>審査委員（主査） 備酒 伸彦</p> <p>審査委員（副査） 春藤 久人</p> <p>審査委員（副査） 藤原 瑞穂</p>
<p>論文題目</p> <p>高齢者に対する転倒予防の新たな戦略： 転倒予防自己効力感と身体能力の自己認識に着目した転倒発生に関する要因分析</p>	
<p>審査結果</p> <p>本論は、多岐にわたる転倒リスク要因がある中で今後より重要性が高いと考えられている、転倒予防自己効力感の程度や身体能力における自己認識と実際の身体能力の乖離度という要因に対して、臨床でどのような転倒予防介入がなされているか、またその効果について明らかにするためこれまでの知見・研究の動向を探るとともに、実際の 地域在住高齢者において、これらのリスク要因が転倒発生にどのように影響を及ぼしているのかについて明らかにしようとしたものである。</p> <p>地域在住高齢者を対象として、転倒歴・転倒予防自己効力感・身体機能（FRT・またぎ動作・TGU）についてデータ取得し、解析、考察を加えたものであるが、実際の調査に先立って、内外の先行研究に当たりその知見を収集した点は評価できる。</p> <p>その上で、①転倒予防自己効力感の低さと身体能力自己認識の乖離の大きさは、非転倒群に比べ転倒群では身体機能低下の程度に関わらず、転倒と高い関連性があること。②身体能力に関する自己認識の実際の能力との乖離は、転倒の発生に対してより説明力の高い因子であることが示唆された。また、③何らかの障害を持ち支援を受けながら日常生活を送っている高齢者は、身体能力を過大評価する傾向が認められ、特に運動イメージ能力の指標となる時間認知能力の過大評価は、転倒の発生と有意に関連していることが示唆された。</p> <p>以上の知見は転倒予防介入を検討していくうえで重要なもので、一定の新規性を認めることができる。</p> <p>よって、論文提出者は、博士の学位を得る資格があると認める。</p>	
<p>審査委員（主査） 備酒 伸彦</p> 	